福祉実践教室を開催しています

～いろいろな福祉体験をいかしてね～

社会福祉協議会では、市内の小・中・高等学校の中から社会福祉について学び、各種事業に取り組んでいただく福祉推進校を指定しています。

今年度は66校を指定し、そのうち小学校40校、中学校20校で車椅子、手話、要約筆記、点字、視覚障害者ガイドヘルプ等の福祉実践教室が障害者やボランティアの方のご協力により行われています。

今年度から、福祉実践教室を開催する全ての学校で全体講義を行いました。全体講義では講師の方に、全員の前で普段の生活や、子ども達にお願いしたいことなどをお話ししていただいています。

なぜ、今改めてこのような時間をとるようになったのか?それは障害者の○○さんとしてではなく、同じ一宮市に住む○○さんとして、いろんな意見や感じていることを、子ども達に伝えてもらう時間をとりたいと思ったからです。

福祉実践教室では体験をしてもらうのも大事な要素ではありますが、福祉は特別な人のためにあるのではなく、**ふ**だんの**く**らしの**し**あわせとは何か、みんな同じ一宮市に住んでいる個人個人として、これからの未来を担っていく子どもたちが、体験を通じて少しでも自分たちにできることは何かを感じ取ってもらえる事を期待しています。

こどもボランティアスクール

～親子で被災地交流～

東日本大震災が発生して早４年が経過しようとしています。被災地では徐々にではありますが復興が始まっており、活気づいてきた街も見受けられるようになりました。

一宮市社会福祉協議会では震災直後から方法を変えながらもずっと岩手県大船渡市を支援してきました。昨年からは「こどもボランティアスクール～親子で被災地交流～」として、市内の小学５、６年生とその保護者を対象に被災地の状況把握と被災した児童との交流・絆づくりをするために２泊３日で被災地を訪れ、支援を行ってきました。

今回、大船渡市放課後児童クラブ「にこにこ浜っ子クラブ」を訪問した際は、名古屋弁講座をはじめ、外で走り回って遊び、昼食には保護者が中心となって名古屋名物の「きしめん」やおやつには「小倉トースト」を作って食べたりして“絆”を深めてきました。

隣町の陸前高田市を訪れ、ボランティアガイドさんと一緒に被災地を巡りました。

今年は保護者のみ「陽だまりサロン」を訪問し、仮設住宅で暮らす高齢者と、笑って歌って踊って“絆”を深めました。

参加者からの声

- 被災地の方は１分１秒を大切にしていた。（５年生）
- たくさんの笑顔と元気をもらった。（５年生）
- 募金だけではなく、被災地のことを忘れないでいることの大切さを感じた。（５年生）
- 今回の経験を忘れず、数年後に復興の様子を見に行きたい。（６年生）
- 今回は行くことが目標だったけど、支援や交流を続けることが一番大切かなと感じた。（保護者）
- 想像以上に復興が進んでいないことに驚いた。（保護者）
- 被災地の方々に心を寄せるということの大切さを知ることができました。（保護者）

まだまだ復興はこれからです。皆様一人ひとりの思いが復興を後押ししていきます。
今後とも被災地支援のためにご協力をお願い致します。
いつか花咲く時まで...。